
白の友達

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の友達

【Nコード】

N1922A

【作者名】

temso

【あらすじ】

ダメ大学生荻谷真次は極度の低血圧。そのくせ彼は下宿生。朝、早起きしなければ単位が危ない！危機感を募らせる彼の元に、ちょっと変わった救世主が現れて…。

プロローグ

初夏。日差しが厳しく照りつける中を、白い猫が歩いていた。

「あ、猫だ」

声を上げたのは、一人の少年。振り返った猫と視線が合った。が、すぐに猫はぷいとそっぽを向く。そのまま歩き出した。

少年が後を追う。

彼はふらふらと幼稚園の外へ出て行ってしまった。

不幸にも、幼稚園の先生はそれに気がつかなかった。

「にゃあ」

「まって、まって」

白い猫は彼を振り返り、とてとてと歩き出した。あわてて後を追う。

右に曲がり、左に曲がり。一人と一匹は歩き続けた。

白い小さな背中中は、塀に囲まれた裏路地へ入っていった。

「?」

覗きこんでみる。薄暗く細い道は少し怖かった。

「あれ」

猫がいない。

とたんに不安になって、周りを見回してみる。背筋が冷えた。ここ、どこ?

怖くなった。不安になった。

とうとう彼は泣き出してしまった。

しかし、ひとけの無いこの道、通りすがって彼を見つける者はいなかった。

少年はただただ泣き続けた。

誰か助けて。

「どうしたの？」

ひたすら泣きじゃくる彼に、声がかかった。きれいな、女の人の声。

「迷子？」

はっとして振り返る。白いワンピースを着た女の人が立っていた。

「その幼稚園の子ね。つれてってあげる。おいで」

安心したら、また涙が出てきた。

女性は苦笑しながら彼を抱き上げると、歩き出した。

幼稚園にたどり着く直前、彼女は彼の耳元に唇を近づけてそつとつぶやいた。

「ごめんね。躰のなっていない子で」

1

チツチツチツチツチ……………。

時計が回る。現在、朝の六時半。

ジリリリ！

枕のすぐそばで、目覚ましは叫び始めた。

「……………」

目覚ましをセットした本人が、もぞもぞと動き始める。

「うっさいな」

なおもがなり続ける目覚まし君は、振り下ろされた手によって沈黙した。

眠そうな目をこすりながらむっくり起き上がったのは、ごくごく普通の青年だった。

しいて特徴を挙げるなら、眠そうなことくらいだ。

彼はバカでかいあくびを一つかまして、再び横になった。

くそったれが。何時だと思ってる。

そもそもセットしたのは自分なのだが、彼はそのことを完璧に忘れ去っていた。

彼が睡眠という名の海に落ち込んでから、二時間が経過した。

今度は、携帯の着信音が彼をたたき起こした。

「あああ、もう！」

うるさくて寝られない！

朦朧としたまま電話に出る。

「あい…。もしもし？」

「コラァ！ 苅谷ァ！」

「ひっ！」

ごつごつした男の声が耳の中で暴れまわった。
とたんに意識が覚醒する。

やっべえ！今日七時半からバイトだった！

「何やってんだ、こんな時間まで！ふざけんなよ！」

「す、すいません。あの、じじじつは何か今日おなが、そう！
腹が痛くて！そりゃもう痛くて痛くて！」

必死の言い訳はむしろ事態を悪化させた。

「ふざけんな！仕事の予約入れた日に限っていつもいつも腹壊す
奴がいるか！」

「え、いや、違いますって！先週は盲腸で」

「苧谷！クビだ」

「あ、ちよつ、支店長！」

電話は切れた。

「あああああ」

またやってしまった。これで三度目だ。

「……………」

落ち込んでいても仕方がない。

こういうところだけはやけにポジティブな青年——苧谷真次は、
気を取り直して再びベッドに倒れこんだ。

どうせ登録制のバイトだったんだ。すぐ他のバイトなんか見つかるよ。

そんなことを考えているうちに、真次はまたまた眠りに落ちていった。
驚くほど寝つきのいい男だった。

「お前なあ。勘弁しろよ」

翌日、近所の喫茶店にて。

真次は友人に文句を言われていた。

「お前がクビになるだけならまだいいんだけどな。お前を紹介したこっちまで昨日はさんざん文句言われたんだぞ。支店長に」

文句をたれている彼は、名を寺田晃一という。真次の大学の同級生である。

二人は講義の空き時間によくここへ来るのだった。

「いや、悪かったって。おごるからさ。許して、な？」

「はあ……………」

晃一はため息をつく。

「それにしてもいいかげん、それ直さないとマズイんじゃないか？」

「何が？」

「だから。そのすぐバイトサボったり辞めたりする癖だよ」

真次はちよつとむっとした。

「サボってるわけじゃない。寝坊だよ。それに昨日のは、クビだった。俺のせいなんかじゃないぞ！」

なんとも情けない主張に、晃一は再びため息をついた。

「一緒だよ……………。ったく」

コーヒーをひとすすり。

「バイトだけならまだしも、お前こないだのドイツ語の授業までサボったろ？そろそろ単位やばくなってくる頃なんじゃないのか」

「う……………」

当たり前のことなのだが、授業は朝からある。

そして彼はひどい低血圧なのだった。下宿生の彼には、起こしてくれる人がいない。

なので度々寝過ごして欠席してしまうのだが、出席が少ないと単位をくれない教授も五万というわけ。

特に件のドイツ語教授は、出席日数が一日でも足りなくなればその時点で即刻落とすという風評のある厳しい奴なのだった。

早起しななければならない。

無論こんなこと、人間としては出来て当たり前のことである。

しかし彼にしてみればそれは、エベレストを踏破することと同じくらい困難に思えることなのだ。

「まあ、なんとかなる………よな？ 多分………」

薄笑いで尋ねてみるが、ため息が返ってくるだけだった。

1 (後書き)

さっそく誤字を発見してしまいました(汗) >br<こんなですが、
よろしくおねがいします。>br<

その夜、真次は必死に頭をひねっていた。

『もし仮に！あんたがどっかの国立大学に受かったら！一人暮らしさせてやってもいい』

この一言が真次に活力を与えたのは昨年夏、高校三年のときだ。彼の家は、お世辞にも余裕があるご家庭とはいえなかった。地方の大学に通わせる余裕はない。行けるとすれば地元の私大か、国立大。そこで真次は粘り強く交渉しつづけ、両親からこの一言を得たのだった。

彼は一人暮らしがしたかった。理由は単純、かつ超がつくほど下らないものだ。

「昼夜いつでもゲームが出来る！」

彼は軽度のひきこもりだった。

彼の当時の学力は平均より少し下、すぐに勉強を始めて間に合うかどうか、といったところだった。やるならマジにならないければならない。だが、やるしかない！

彼は一念発起、猛勉強を開始し、栄光を勝ち取った。

やったんや！俺はやれば出来る子なんや！

ところがここにきて、この窮地である。

なぜそこまで、彼が悩むのかとお思いの方もいるだろう。

実は彼の通う大学は、実家と同じ県内。ありていに言って、通えるくらいの距離のところにあるのだ。事実、定期を買ったほうがマシジョンを借りるよりはるかに安い。

ここで単位を落としてもすれば、いったい何を言われるやら。

最悪、実家に強制送還されることだってありうる！

とにかくこれ以上、寝坊するわけにはいかないんだ！

真剣な割にはくだらない悩みだった。

とにかく彼は頭を回転させた。こんなに真剣に頭を使ったのは大

学入試のとき以来だ。

さあ考えろ！どうすれば朝必ず起きられるんだ！

早く寝よう。

二時間もかけて考え出したアイデアはそんなもんだった。

どうやら彼の脳みそは大学に入学してからたった二カ月足らずでずいぶんと退化してしまったらしい。

「よし、もう寝よう！」

真次は時計を見た。

A M 1 .. 3 0。

無情にも、デジタル時計はこう表示していた。

「そんな……」

もはや、早寝とはいえないではないか。

というか、だいたい彼が寝るのはいつもこの時間帯なのだが。

「ああ、どうすればいい！」

それからまた三十分ほど考えて、彼はこう結論を出した。

寝なければいい。

翌日彼は、正午、キッチンにて目を覚ました。

床にはコーヒーの粉が散らばっていた。必死の抵抗の跡である。
そして、彼の単位はますます危うくなって来たのだった。

3

白猫が、昼下りの町をふらふら歩いていた。

揶揄ではなく、本当にふらふらだった。放っておけば数分後にもぼたりと倒れてしまいそうな足取りだ。

野良犬にでも襲われればすぐにぼっくりだろう。

猫は歩く。どこへ行こうというのか。

猫自身にも、もうそれは分からなかった。

ただただ歩く。

まだ自分は死ねない。死にたくない。

それだけが明白だった。

「はああ」

ため息が初夏の町に吐き出された。

ため息の主は真次である。

原因は簡単。今日も寝坊して朝の授業をすっぽかしたのである。

彼は自転車に乗って大学からマンションに帰る途中だった。

「やっぱ、二度寝がいけないんだよな」

彼は目覚めてから三十分間、大切なことを思い出せない脳の持ち主だった。

「なんかいい方法はないかな」

くだらない悩みをかかえて、自転車はマンションに向けて走っていく。

猫は歩く。

その目には、もはや何も映ってはいない。

夏の太陽に灼熱したアスファルト。足の裏が熱い。
死にたくない。

自転車は、商店街の交差点にさしかかった。

ほとんど車も通らないような場所だから、真次は減速もしなかった。

なにげなく交差点を通過しようとした、そのとき、白い小さな影が目に飛び込んできた。

「!!」

とっさにハンドルを左に。バランスを崩し、そのままのスピードで対面のガードレールに突っ込んだ。

がっしょん!

彼は地面にしこたま打ち付けられた。

「いってえ!」

彼は喚いて身を起こした。奇跡的にも、特にひどい怪我は見当たらなかった。

が、いきなり強いショックを食らったせいで、視界がなんだかぐにやりと歪んでいる。

「うろう、なんなんだ」

歪んだ視界の片隅に、さっきの白い影が見えた。

猫だ。

「ああ、このクソ猫!痛いじゃないか……って、あれ?」

猫は横になって倒れていた。動いていない。

真次は背筋を冷やした。

ひょっとして、轢いちゃった？

おそろおそろ確認してみる。

目立った外傷はなかった。それにさっきも、特に轢いちゃったような感触はなかったし。

「ああ、よかった」

彼は安堵したが、目の前で猫が倒れているという事実を思い出して思案した。

「生きてるか？」

とりあえずよく見てみる。おなかの辺りが一定のリズムで動いている。

息はあるようだ。

「どうしょ？とりあえず、近所の獣医にでも…」

「水……」

「あ、水か。ちょっと待ってよ」

彼は倒れた自転車のかごから鞆を引っ張り出すと、ペットボトルを取り出して猫の口にあてがった。

ちよつとずつ傾けてやる。スポードリンクが口の周りに滴った。小さな口がもによもによと動いて、水を口腔に流していった。

「ん？」

真次はなにかちよつとした違和感を覚えたが、気にしないことにした。

まずは人命救助が先だ。猫だけど。

しばらくそうしながら、彼は昔のことを思い出していた。

思えば昔から猫が好きだった。

幼稚園の頃から目に付いた猫の後を追いまわしては迷子になっていた。

そのたびに大泣きして、大人に救助されたものだった。

大泣きしてる最中、おしっこが我慢しきれずにスプラッシュしてしまったこともある。

懐かしいなあ。

真次は遠い目をしたが、それがいい思い出と言えるかどうかは微妙なところだった。

十五分ほどたった頃、ようやく猫は活力を取り戻した。まだ頼りない動きではあったが。

「ふう、よかった」

猫好きとしては感慨深い。

「ああ、助かったわ。あんがとね、兄ちゃん」

「ああ、気をつけろよ」

真次は手を振る。猫はすぐそばの垣根の中に消えていった。

「？」

何か強い違和感を再び覚えたが、彼は気にしなかった。

理由は二つ。

大破した自転車が目の前に倒れていること。

そして彼の脳みそが、人並みに稼動していなかったことである。

大破した自転車を引きずってマンションに帰った真次は、夜の九時になる頃には布団の中にいた。

「こんだけ早く寝りゃ、絶対早く起きられるだろ」

思考が極端な男だった。

明かりを消す。窓から月の光が差し込んでくる。

「むー」

当たり前だが、早すぎて寝付けない。

真次は考え事をすることにした。

ああ、もうじき夏休みなんだっけ。テストもあるなあ。でもその前にまず出席日数を確保しないとテストも受けられないもんなあ。金ないなあ。早いところ新しいバイト見つけないとな。

いくら生活費は出してもらってるつつても小遣いは自分で稼がなきゃいかんからなあ。

そういえば晃一の奴、最近なんか羽振り良いんだよな。

ああ、確か先月バイトかなりやったって言ってた。給料日か。なんかうらやましいよ。

しかし、昼間はえらい目にあったなあ。

自転車はぶっ壊れるし、体は痛いし。

でもたいした怪我してないもんな。丈夫に生んでくれてありがとう、かあちゃん。

あの猫大丈夫かな？倒れちゃうくらい弱ってたんだ。水やったくらいでいいのかな？

まあ、猫ってのはタフだからな。口ぶりもしっかりしてたし。

口ぶり？

『ああ、助かったわ。あんがとね、兄ちゃん』

「うええええ！？」

ようやく彼は異常性に気がついた。

あの猫、しゃべってたよな！？

俺、猫と会話してたよな！？

彼はしばらくハニワのように口をあけて呆けていた。

が、立ち直ると首を振って自分に言い聞かせた。

何考えてんだか。猫がしゃべるって？ああ、疲れてんだな、俺は。最近神経張ってたからなあ。なんせもう一日でも休めないし。

よかった。今はまだ九時半だ。朝までたっぷり寝られる。

早く眠って疲れを取ろう。

結論がそこに行き着くと、彼はぎゅうつとまぶたを閉じた。

今日は木曜日。明日を乗り越えればとりあえず休みだ！

そのうち、彼は自らのホームグラウンド、すなわち睡眠に帰っていった。

一度寝ると、真剣だった表情はうそみたいにだらしく変貌していった。

そして、朝日が昇るか昇らないかという時間帯――

「起きろ！」

声が聞こえた。ベランダの方から、若い女の人の声。

そういえば、昼間聞いた幻聴もこんな声してたな。

「ねえ、起きてって！」

ああ、やっべえなあ。寝てるのに全然疲れが取れてない。夢にま

で出てくるなんて。

「いい加減にしてよ！」

医者に行こう。

「あああ、もう！」

真次は起きなかった。が、彼は夢の中でお医者さんに聴診器を当てられていた。

「怒るよ！」

声はもう怒っていた。

「いやあ、そこは。そこは、勘弁して下さいよう……………」

寢言だ。夢の中でお医者さんに変なところでも触られたのだろう。

「……………」

何かがぷつぷつ切れる音がした。

そいつは前足を振り上げると、鋭く尖った爪を窓ガラスにあてがって――

ものすごく不快な超音波攻撃が、そのマンションの住民達の耳に襲い掛かった。

「うわあ！」

さすがの真次も飛び起きた。

背筋にぞくぞく不快感。

ちなみに余談だが、この攻撃に驚いて失禁してしまったものもいた。余談だが。

「な、いったいなにが」

「やっとう起きた！」

「は？」

真次は声のした方向を見る。

網戸の向こうに、白い小さな奴がいた。

猫だった。

「ったく。ほんと寝起き悪いね」

あきれた声で白猫がしゃべっていた。

「ああ、なんだ。まだ夢見てんのか」

真次はへらへらと笑った。

「夢？」

猫が聞き返す。

「だって夢だろ？」

「夢ねえ……。そう思うなら、ちよつとここ、開けてよ」

「いいよ」

真次はベッドから降りて網戸を開けた。白猫が入り込んでくる。

「手、出して」

「ほいほい」

言われるままに手を出す。

バリ。

猫の白い前足がすばやく動いた。

「ん？」

前に出した手の甲を見してみる。

引っかき傷。吹き出してくる血。

それでも真次は笑った。

「何されたっていいよ。だってこれ、夢、だし……」
痛い！

「うぎゃああ！」

痛い！痛い！

「ち、血！包帯！絆創膏！オロナイン！」

慌てふためく真次に、猫は言ってやった。

「どう？それでも夢？」

4 (後書き)

よかったら読んでってくださいね！

朝焼けがまぶしい。

真次は早朝のすがすがしい空気を思い切り吸い込んだ。

「ああ、朝って良いな」

目を潤ませていると、そこに声がかかった。

「ねえ、聞いてんの？」

「はい。聞いてます聞いてます」

あちこちに痛々しい生傷を作った真次は慌てて正座した。

話の最中に居眠りをしまくってその度に起こされた結果だった。

「……でも、しゃべる猫なんてのが本当にいるなんてな」

「そんなに不思議なの？」

白猫はきよとした目を向けた。

昨日見たときも思ったが、ノラにしてはきれいな猫だった。ところどころ薄汚れてはいるものの、毛並みは純白。とても高級な質感があふれていた。

「田舎じゃ、じいさん相手によくしゃべってたんだけどなあ」

「へえ。っていうことは、こちら辺の猫じゃないの？」

「そう。母さんを探しに来たの」

「母さん？」

白猫はうなずいた。なんだかコメディークCMにでも出てきそうな光景だった。

「そう。ちっちゃいころはぐれた母さん探してんの。もう五年も前になるかな」

「五年って……。あの、年いくつ？」

「十六」

真次は持てる限りの常識を動員して考えた。

猫の寿命ってそんなに長かったっけ？

十六ってもうばあちゃんなんじゃないか？

「あの……」

「ああ、言いたいことはわかるよ」

猫は前足をぴらぴら振った。

「あたしらの寿命ってのは、基本的に人間と一緒にくらいなのよ。

しゃべる猫だから」

真次の脳裏で、常識とかそういったものが音を立てて崩れていった。

「……じゃあ、その、お前らみたいなしゃべる猫は、単に言葉をしゃべるだけの猫じゃないってこと？」

なんだかわかりにくいことを口走るが、白猫は真次のいわんとすることがなんとなく分かった。

「そうそう。つまりあたしらとただの猫はまったく別の生き物ってことになるね」

「ははあ」

真次は息を吐き出す。

改めて考えてみれば、これはいったい何と奇妙な光景だろうか！早朝、朝焼けの中で、変なしゃべる猫と会話している！

何より、こんな時間（AM 6:00）に起きている！

異常だ。この上なく異常だ。

自分でそう思うところがたくましかった。もしくはバカともいう。ふと気づいて、彼は尋ねた。

「つていうか、なんでここに来たの？俺って何か関係あんの？」

「ああ」

猫は真次に向き直った。

「まずはお礼、かな。ほんと、助かったから」

「はあ」

「マジで死にかけてたのよ。あのとき。どこを探しても水飲めるところがないし、周りはもっさり暑いし、コンクリは鉄板みたく熱くなるし、犬には追い回されるし」

「……のど渴いてただけなのか。結局」

真次はなんとなくげんなりした。

「バカ言わないでよ。あれがどれだけ苦しかったことか」
変な猫は大仰に前足を振り回して語った。

「ああ、も、もういいよ。よく分かった。大変だったねえ。かわいそうに」

「……ふん。わかりやいのよ」

ふんぞり返って腕を組もうとするが、構造上無理だった。

「で、本題なんだけど。アンタ今、困ってんだよね？」

真次は目をかっぴらいた。

「何で知ってんの!？」

「アンタがああ交差点から歩いて帰る途中で『困ったなあ。困ったなあ』って独り言ずっと言ってたから」

「……………そうですか」

「ね、何困ってんの? 話すだけ話してみてよ、ね?」

「………なんか、たくらんでる?」

「簡単なことだよ」

猫はこともなげに言う。

「母さん探してるって言ったよね。正確に言うと、母さんの事知ってる人がこの町にいるって言うから、その人を探してるの」

「猫?」

「ああ。うん。その人ってのは猫だよ」

ややこしいな!

「で、その人はこの町にいるらしいのよ。おととい着いてからずっと探してるんだけど、全然見当たらない、と」

「はあ」

「でもこのままの調子で探してたら、正直きついんだ。あたしこの町に不慣れでさ、水が飲める場所もものが食える場所も全然分からない」

「はあ」

「こういうときには、人間に頼るのが一番!」

「……つまり、俺に世話をしろって？」

「ただとは言わないよ」

そいつは猫のくせに、やたらとかつこよく言った。

「その見返りにアンタの悩みを解決してやろうってこと！」

猫が解決できる人間の悩み。

本当に猫に解決してもらったなら、かなり情けない奴ということになりかねない。

なりかねないが――

「このまま単位落として『来年もよろしく。しかも実家からね』みたいなことになるよりはずっと良いよな」

真次はうなずいて、白猫に事情を話した。

しゃべる猫も呆れ果てた。

普通、そんなことで悩むか？

猫の目は如実にそう語っていた。

「じゃあ、なんだ。その。これから二週間、アンタを朝八時きっかりに起こす。ってことでいいの？」

「ああ。助かるよ」

掛け値なしにそう思う。

再来週にテスト週間がある。今日の金曜日を含め、来週の授業には休まず出席しなければテストを受ける資格を失ってしまう。

もしそうになったら……

へたしたら、留年だ！それだけは、それだけは避けなければ！何度も言うが、彼は本当に必死なのだ。

「じゃあ、今晚から早速泊めてもらうね。サンキュー」
白猫のウィンク。

真次はふと冷静になって考えてみた。

これって、考えてみたらすごいことだよな。

自分のほっぺをつねってみる。

古典的な方法ながら、効果は覲面だ。

「痛い」

5 (後書き)

感想等ありましたら、ぜひ教えてください！

猫は翌日から早速仕事をこなした。

その日は土曜日で授業なんかなかったのだが、そいつはお構いなしだった。

「アンタがちゃんと説明しないからよ！」

おっしやるとおり。弁解の余地もない。

夜の十一時ごろになると、猫がやってくる。

寝る前にいろいろと話をした。

「そういえば、名前なんていうの？」

「ああ。刈谷真次。お前は？何か名前があるの？」

「当たり前」

そう言って猫は一声鳴く。

にゃゝ。

「え？」

「だからあ、」

にゃゝ。

「だってば！」

「うゝんと……にゃあゝ？」

「違う！」

にゃゝ。

「にゃあああ」

「ああもう！」

なんらかの猫的发音があるらしいのだが、真次にはわからない。結局、かろうじて名前っぽく聞こえる、という理由から『ミア』と呼ぶことになった。

「何で母ちゃんとはぐれちゃったんだ？」

テレビで野球の試合結果を眺めながら真次は尋ねた。

「あー、それはね。その」

なぜかミアは口ごもった。

「どうした？」

「その。夏の、ある日にね。あたし達の住んでた町にすんごい夕立がきたのよ」

「ふんふん」

「それでその、雷とかめっちゃくちや鳴ってて」

「ふんふん」

「すぐ近くに『びしゃーん！』って落ちてたりして」

「ふんふん」

「それで、怖くなってすぐそばにあったトラックの荷台に隠れてたら」

「あー」

なんだか先が読めた。

「…………気づいたら、長野の山奥に」

「うわぁ…………」

思ったよりひどい。

そしてはずかしい思い出だった。

「で、死にそうな思いで帰ってきたら母さんがいなくなってる」
前の話から換算するに、長野から自分の町に帰るのに五年も費やしたことになる。

「かわいそうに」

本当にそう思った。なんだか不幸まみれだ。

「母さんのこと知ってるのはコロネさんだけ。だから聞いてみようと思ったんだけど」

「ころねさん？」

「ああ。母さんの知り合いの人の名前」

「猫？」

「うん。コロネさんは猫」

ややこしいんだよ！

「コロネさん、居酒屋で飼われてたんだけどね。訪ねていたら、

なくなってたのよ。店」

「あら」

不幸はまだ続くのか。

「で、よくしゃべってたっていうじいさんに聞いたら、コロネさんは飼い主の引っ越しでこの町にいる、って」

「そうだったのか」

真次はちよつと赤らめた目でうなずいた。

なんてかわいそうで、なんてけなげな猫なんだろう。

涙もろいやつだった。

涙もろいやつは鼻水をチーンとかんでから尋ねた。

「それで、コロネさんには会えたのか？」

「ううん」

ミアは首を横に振った。

「ダメ。ぜんぜんダメ。全く」

「そうかあ。でも、がんばるんだぞ。協力するからな」

「ありがとね」

白猫はウインクする。あまり見られない光景だが、それはとてもかわいらしかった。

そして、猫好きにはたまらない光景だ。

男は思わずミアににじり寄る。顔の筋肉はだらしくもたれ下がり気味であった。

「な、何？」

迫りくる猫好き。ミアは思わず身構えた。

我慢しきれず真次はミアに飛びかかった！

フギヤア！

「さわんじゃねえ！」

毛を逆立てたミアは迫り来る顔面を思い切り引っかいいた。

「うぎゃあ！」

真次は飛び退く。床を痛い痛いと言げまわった。と同時に、少しばかり反省した。

そうだった。猫って言っても、こいつは女の子なんだよな。
俺としたことが、何ということをして！

「いや、ごめんよ。悪かった」

真次はすなおに謝った。

「わかりやいのよ」

ミアが言う。やっぱりどこかふてくされた様子だった。
そんなミアを見て、あることを思いつく。

「ちょっと待ってなよ」

そうとだけ言って、部屋を出て行った。とはいっても、部屋数は
二つしかないのだが。

「？」

がさごそと音がする。

真次はすぐに戻ってきた。

両手に牛乳パックとアルミの皿を持って。

「お詫び。ほら、飲めよ」

ちよろちよると注いでやる。が、ミアは動かなかった。

「……まだ怒ってる？」

「カフェオレがいい」

猫は注文を付けた。真次はきよんとする。

「へえ、猫なのにカフェオレなんか飲むのか。いいよ。ちよつと
待ってて」

台所に向かう背中に声がかかった。

「プリンも食べたい」

「あー、しょうがないな。明日にでも買ってくるよ」

怒った女の子には勝てないもんな。猫だけど。

「アイスも」

「……うん。しょうがないよな」

半ば自分に言い聞かせるような声で言う。

「明日はサンマが食べたい」

「このミルク、脂肪分が少ない。せめて3．8はないと」

「この部屋ちょっとくさいよ。なんとかしてよ」
「ちよつとは片付けたら？」

「……………」

なんてわがままで、なんて面倒な猫なんだろう！

みくんみんなみんな……。

うるさい。

それに、蒸し暑い。日陰だというのに。

前の町は、日陰にいればまだしのぎ易かったのに。

自慢の毛並みも、天然サウナの中にあっては邪魔なだけだ。それどころか暑さのやつを手助けしている気配すらある。ああ、ちくし
ようめ。

彼はここのことろそんなことを考えながら一日を過ごしていた。

つまりは、暇なのだ。

彼は縁側にごろんと横になった。やることがなければ寝るだけだ。そこへかわいらしい声が聞こえてきた。

「……いいね。楽そうで」

彼は飼い主である女の子に反論を飛ばした。

「うるさいな。別に暇なわけじゃないんだぞ」

水曜日。AM8…00、とあるマンションの二階、ベランダにて。
窓ガラスが悲鳴をあげた。
マンションの住民もみんな悲鳴をあげた。

「お前な！」

珍しく激昂した様子で真次は叫んだ。背筋がぞくぞくしている。

「いいかげんこの起こし方やめてくれよな！」

すこし削れた爪をしげしげと眺めていたミアは、彼を睨み返した。
「アンタがもうちょっとすんなり起きたら、あたしだってこんなこと！」

実際、彼女はがんばっていた。

耳元で大声を出したり全身をくすぐってみたり。

でも、ダメだったのだ。

大声を出しても、彼は起きない。

正確に言うときき上がりはするのだが意識はまだ夢の中なのだ。
くすぐっても無駄。

むしろ気持ちよくなってしまいうらしく、

『ううん……。いやあ、あはは。……ああん』

こんな感じだった。

あまりに寝起きが悪いので、しまいには息を止めてやろうかとさえ思った。

さすがにやめておいたけど。

で、とうとうこの攻撃だ。

本当はイヤなのだ。自分だってこんな音が好きなわけない。

「じゃあ何！？ アンタは毎朝顔中血まみれになって目覚めたいわけ！？」

「いや、それはちょっと……」

ミアの鋭い鋭い爪をチラッと横目に見て、真次は首を横に振った。

「でもほら。それだと周りの人たちにもすごい迷惑がかかったやうような気が」

「だったらもうちょっと、『起きる努力』ってのをしてよね。ったく」

簡単な仕事だと思っていたが、とんでもない重労働だ。

精神的に。

ため息をつくミアをよそに、真次は大あくびをかましながらキッ

チンに向かった。

持ってきたものは昨日買ってきたメロンパンとコーヒ―牛乳のパック、それにアルミの皿。

ちよろちよろとコーヒ―牛乳を皿に注ぎながら尋ねる。

ミアは朝ごはんを食べないそうなので、これだけだ。

「今日もコロネさん探し？」

「うん。まだ見つからない」

「昔いたっていう居酒屋って、なんていうんだ？」

「えーとね。確か『かんちゃん』だったかな」

「かんちゃん、ねえ……」

もしその飼い主がこちらでも店を出していたなら、どこかで見かけたかもしれないが。

パンをかじりつつ考えるが、思い当たらない。

まあ、住み着いてからまだ二ヶ月ほどしか経っていないのだから仕方ないことなのだが。

「悪いけど、記憶にないなあ」

ミアは苦笑した。

「別に良いよ。もし見かけたら教えてくれれば、それで」
「ん」

うまそうに白猫はコーヒ―牛乳をなめた。

朝って気持ちいい。

およそ彼に似つかわしくないことを真次は考えた。

ミアが出発してから十分もすれば真次も出かける時間になる。
鞆に必要なもの、必要ないものいろいろ詰め込んで、玄関で靴を履こうとしていた時だ。

ピンポーン。

「んー？」

首をかしげながらドアを開ける。

立っていたのはこのマンションの大家のおばさんだった。

「どうしたんですか？」

「朝早くにすみません。荻谷さんってペットとか飼ってます？」

「え」

そういえば入居する時にペット禁止という文字を見かけた気がする。

大家さんはこのマンションとは別のところに住んでいるし、周りの部屋からは公然とニャーだとかワンだとか聞こえてくるからすっかり忘れていたのだ。

怒られるんだろうか。

「あ、いや。その」

「あ、いいんです。別に飼うのがダメとか言うんじゃないって」

「入居するときにはダメって一応、言ってるんですけどね。一度一緒に暮らしたペットを捨てるとは言いにくいですから。かわいそうですし」

いい人だなあ。

青年は感動した。

「最近、このあたり猫が多いみたいで。近所から苦情があったらしいんです。それで保健所に連絡が行ったって」

「え……」

「だから、もし荻谷さんが猫とか飼っているなら、せめて首輪はつけておいてあげてくださいね。脱走して万が一、ということがあるかもしれませんし」

つまり、ミアが野良と間違われたりすれば……。

「はい…。わかりました」

いつになく真剣な表情で答える。

と同時に、またまた感動した。

ほんとにいい人だなあ。

「ありがとうございます！」

「いいえ。ペット、大事にしてあげてね」

白猫は灼熱したアスファルトを避けて、ブロック塀の日陰でお昼寝していた。

搜索が進まない理由のひとつはこれだった。

なんせ、一日に5〜6時間はこうして過ごしているのだから。

「…………暑いなあ」

だいたい、こんなクソ暑い中歩き回る奴のほうがおかしいのよ。

ミアは道を行く人々をうつろな目でながめた。

スーパーへ自転車で買い物に出かけるおばさん。

得意先回りと思われる中年サラリーマン。

楽しそうに遊びまわる幼児たち。

あいつらはクーラーや扇風機が何のために存在するのかわかっていないのだ。

「まったく……」

ミアが大儀そうに寝返りを打つ。

ふと、影がさした。

「？」

振り返る。女性が立っていた。

年齢は12、3くらいに見えるので、どちらかという少女だ。

「この辺の猫じゃないね」

「…………」

よそ者猫は黙って少女を見上げた。

少し警戒心が頭をもたげたのだ。暑かったから機嫌が悪いということもあるが。

「自慢じゃないけど私、近所の猫はみんな知ってるんだよ」

少女は自慢げに言った。

「きれいな白猫なんだね。すごく珍しいよ」

「…………」

ミアは無視を決め込むことにした。

本当は、ミア的には猫好きという人種はうざったいのだ。（ご飯をくれるという点以外で）

彼らは人が（猫が）寝ているところにやってきて肉球をいじったり顔をべたべた触ってきたりする。迷惑以外の何物でもない。

だから彼女には、飼われている猫がのどを鳴らして人間にじゃれつく気持ちがいまいちわからない。

真次は最初に襲い掛かってきたとき以来何もしてこないから、まあ、いいだろう。

「ねえ、ちょっとうち来ない？うちにも猫はいるんだけど、暑い暑いって言っているばかりで全然かわいくないのよ」

目をきらきらさせて少女は言う。ホンモノの猫好きらしい。厄介な。

「……………」

そっぽ向いて黙りこくる。女の子が手を伸ばして頭を撫で回してきたが、これもきっちり無視だ。

だんだん少女も不機嫌になってきた。

「かわいくないなあ。あいつみたい」
無視。

「……………あゝあ」

少女はやれやれといわんばかりに両手を広げてアメリカンなりアクシヨンをした。

白猫のそばから離れていく。

「やれやれ……」

ミアは息を吐き出す。と、少女が振り向いた。
やば。聞こえちゃったかな？

「じゃあ、またね！」

そのまま去っていく。気づかれてはないようだ。

白猫はしばらく少女の後姿を見ていたが、その姿が見えなくなるとあくびをひとつして冷たいコンクリにへばりついた。

その夜。

「何これ？」

「首輪だよ」

そんなことはわかってる。

「だから、なんであたしがこんなもん付けなきゃいけないの？」
ベランダから部屋に帰ってきたミアに、真次が突きつけたものは
革製の首輪だった。

「言っとくけど、あたしは別にアンタに飼われてるわけじゃない
んだよ」

不機嫌そうに言う猫に、真次はへこした態度で説明した。
親が見たら、たぶん泣くだろう。それくらい情けない光景だった。
「だから、これつけてれば保健所の職員がミアをとっつかまえて
も野良じゃないってすぐ分かるだろう？」

「野良とか言うな！」

「ご、ごめん。あ、いや、そうじゃなくて、つかまったら十中八
九命ないんだから。な？それくらいはいいだろ」

「こんなきれいなあたしが、野良に見えるわけないでしょ」

ふてくされている。

「もし見えちゃったらどうするんだよ？つかまったら本当に殺さ
れるんだぞ」

「……………」

真次の表情は真剣だった。

……心配してくれてるのか。

「しょうがないな」

ミアはそっぽ向いて言った。

「わかったから、さっさとそれつけちゃってよ」

「よし」

真次はミアの後ろに回りこんで、革のバンドを白い首に巻いた。

「できた」

しゃらん、と鈴が揺れる。

赤い皮ひもと小さな鈴は、白い猫によく似合った。

「どうだ？」

「ふん」

またそっぽを向いて鼻をならした。と、窓ガラスに映った自分が目に入ってくる。

しばらく、それをまじまじと見つめた。

8 (後書き)

少しずつ物語が動いていってます。あれこれと。
楽しんでいただければ幸いです。

金曜日、夕方。

「はい。じゃあ、今日はこれまで。来週はテストだから絶対に休んだりしないようにな」

言語学の教授がそう言って教室を出て行った。そのとたん真次は机に突っ伏した。

乗り切った。

無遅刻、無欠席でこの一週間を乗り切った。

達成感でいっぱいだったが、もう一度気を引き締める。

いや、来週こそが大事なんだ。テストなんだから。

「おい。真次」

一人拳をにぎって気合を入れていた彼に、晃一が声をかけた。

「何してんだ？かえろーぜ」

「あ、うん。おう」

慌てて立ち上がる。二人は教室を出た。

「何か最近、お前顔色悪くないか？」

晃一が聞いてくる。実際、真次の顔色はあまりよくはなかった。

「ああ、毎朝起きるのに苦労してんだな」

「……っていうか、なんだ。起きるまではいいんだけどさ。その、起き方が問題なんだ」

「は？」

「いや、いいんだ。思い出したいくないから……その話題、やめよう」

あの音は、それくらいインパクトがある。

近隣住民はいい迷惑だった。

げんなりした友人を横目に、晃一は首をひねった。

どんな起き方してんだ？

気にはなったが、真次があまりにもグロッキーな様子だったから

訊かないでおいた。

その程度には気の利くやつだった。

「よし。疲れてんなら、カレーが良いぞ。食いにいこうぜ」
別に栄養に詳しいわけではない。雰囲気だ。

「カレーかあ」

そういえば最近食べていない。考えたら腹が減ってきた。

真次の脳内でインド人が手招きをしていた。とても魅力的だった。

「いいね。行くか」

「よーし。うまいとこ知ってんだ。任せろ」

「ここだよ。ほら」

真次が連れて来られたのは、大学から歩いて十分ほどのところにあるカレー屋だった。

掘っ立て小屋みたいな外装に、汚い看板。『カレー』という表示がなければそれとは分からないだろう。

人通りのあまりない、閑散とした通り。このカレー屋以外にもいくつか店が立っているが、どれもこれも景気は悪そうだ。

「こんなとこがあったのか」

「だろ？このへん面白い店とかはないから、大学の連中もあんまり来ないんだ。でも、うまいんだぞ？このカレーは。隠れた名店ってやつ」

真次と同じでまだ入学して半年も経っていないのに、すごい古株みたいに言う。

「へえーえ」

脳裏でインド人が踊りはじめた。テンションが上がってくる。

「では、いざ」

二人は掘っ立て小屋に歩を進めた。

うまい！うまい！

この言葉が店内を埋め尽くした。
極上だった。

「なんてこった」

俺はこんなおいしいものの存在も知らなかったのか。
無愛想な店のおやじに感謝を述べ、二人は店を出た。
代金を払い忘れていたので、おやじに怒鳴られた。

「うまかった」

店を出た真次は述懐した。というか、まだ言ってる。

「だろ？ここらはどういう店が多いんだ」

そう言って晃一は、通り沿いの店たちを指差した。

お好み焼き屋、ラーメン屋、食堂、居酒屋……

居酒屋のところで真次の目が止まった。

『かんちゃん』

「あれって」

「ん？知ってるのか？」

「あ、いや」

晃一が訊いて来るが、真次は首を横に振った。
さすがにあの猫のことを話すのは気が引けた。
頭のイタイ子だと思われたりしたら嫌だからだ。
(それにしても、偶然ってあるんだな)

こんな近くで見つかるとは。

確認してみようかとも思ったが、やめておいた。

お腹はぽんぽんなのだ。酒も飲めない。

居酒屋に入る動機がまるでないのだ。

焦ることもないだろう。

「まあ、帰ってきたら教えてやりゃあいいか」

「え？」

「あ、いや。なんでもないよ」

しかしその夜、白猫は帰ってこなかった。

夜の十二時を回っても。それから一時間経っても。

こんなビッグニュースがあるというのに。

ミアがいつ帰ってきててもいいようにと、その夜は網戸を空けて布団に入った。

9 (後書き)

これを書いた時、無性にカレーが食べたかったです。
そのせいでこんな文章が出来上がってしまいました。
というか、いつもの感じですね。
楽しんでいただければ(笑)

真次がくだんの居酒屋『かんちゃん』を発見する少し前。

実は少し離れたところにミアはいたのだ。

「いつも少し、遠出し過ぎてる気がする。今日は近目を攻めてみよう」

なんて感じで、彼女は薄暗い路地をぶらぶらしていた。

狭苦しいが、日の当たらないこの道は涼しくて気持ちいい。

搜索という名目の散歩を楽しみながら、猫は昔のことを思い出していた。

思えば昔からやんちゃだった。

小さい人間のガキを連れ回して途中で置き去りにし、ガキが泣くのを楽しんでいた。

そのたびにひどく怒られたものだった。

泣きながらおもらしまでしたガキンちもいた。

懐かしいなあ。

ミアは遠い目をした。実に悪質な犯行だった。

「そういえば」

周りを見回す。

風に揺れる木の葉。

ささやかな木漏れ日。

そしてこの、薄暗い細道。

コロネさんやあのひとに初めて会ったのも、こんな感じのところだったな。

コロネさんのぽってりした動きを思い出す。少し笑えた。

「……ん？」

前方に、ぽってりした背中が見えるような気がする。木陰から抜けた陽だまりの中に。
目を凝らしてみる。

茶色と白の、ぽってりした背中。大きな体を左右にゆする歩き方。あの猫は。

白と茶色は、どんどん前に進んでいってしまう。ミアは追いかけた。

「待って！」

声を上げても、止まってはくれなかった。

白猫は走り出す。しゃらしゃらと首の鈴が鳴った。

裏路地を抜け、交差点に飛び込んだ。

大きなトラックが、迫っていた。

けたたましいブレーキの音。迫りくる巨大な車体。ミアは動けなかった。

「んん？」

茶色と白が大きな音に振り向いた。

トラックはミアの鼻先で止まった。

運ちゃんはあわててドアを開け、飛び出してきた白猫を確認しようとした。

その眼前を、白猫が逃げるように走り去っていく。
よかった。轢いてなかった。

死ぬかと思った。

心臓がとれたての活魚みたいに暴れまわっている。

「ああああ」

ミアはうつむいて思い切り息を吐き出した。

でも、まだ生きてるよ。よかった。ありがとう神様。

「大丈夫か？」

いきなりかけられた声に、彼女は何とか答えた。

「ああ、うん。なんとか」

顔を上げる。

ミアは目を見開いた。

白と茶色の、ぽってり。

「久しぶりじゃないか。嬢ちゃん」

「コロネさん！」

さっきの裏路地にて。

二匹の猫が語らっていた。

比喻じゃなくて、本当に語らっていた。

「そうかあ。大変だったな、本当に」

真次と同じ反応でコロネさんは涙を流した。

「まったくだよ」

ミアはまたまたふんぞり返った。

「コロネさんは、元気だった？」

「ああ。毎日のように近所のネズミどもと戦ってる」
コロネさんはかっこつけて言った。

本当は縁側で寝てるだけなのだが。

「へえ。変わってないね」

「ああ……」

沈黙。

「……？」

快活なコロネさんが黙りこくっている。珍しい。

「コロネさん？」

「……あいつを、探しに来たんだったな」

「うん！」

本題を切り出されたミアは身を乗り出した。

「あいつとうちの達也が結婚……再婚か。したの、知ってたか？」

「そうなの？」

確か達也とは、『かんちゃん』の跡継ぎ息子のことだ。

「三年前の引越しでな。一緒に越してきたんだよ、この町に」

「そうなの！？」

ということとは、母さんはこの町に。

「ねえ。母さんは？家にいるの？」

にわかには勢いづいてミアは尋ねた。

「……ついてきなよ」

コロネさんはぽってりと歩き出した。

土曜日。AM8・00。

真次はむっくりと起き上がった。

なぜだか目が覚めた。

ベランダのほうを見てみる。網戸は開いたままだった。

ミアが帰ってきた形跡はない。

真次は首筋を掻いた。

ふくらはぎも掻いた。

腕も掻いた。

かゆい！

網戸を開けっ放しで寝ていたから、蚊が入りたい放題だったのだ。

「ちくしょう。ミアの奴」

全部を猫のせいにして、網戸を閉めようとベランダに向かう。

赤い小さなものが目に止まった。

首輪だ。この間ミアにあげた、真新しい首輪。

ベランダの手すりに引っかかっていたそれを、真次はつまみ上げた。

鈴がしゃらんと鳴った。

「これって」

どういうことだ？

真次はない脳みそを必死に絞った。

いらなくなった、ってことか？

コロネさんに会えて、母親の居場所がわかったのかな。

だとしたら、喜ばしいことには違いないが。

「声ぐらいかけてくれりゃ良いのに」

テスト前ということを除けば、いつもと変わらない週末が流れた。昼飯のカップラーメン。正午のお笑い番組。今週は特に面白かった。

冷蔵庫の中身が尽きかけているのを思い出して、買い物に行く。スーパーの乳製品売り場。普通の牛乳とコーヒー牛乳が並んでいた。

「……………」

茶色いパックを手取る。

真次は苦笑した。

もう別にこっちじゃなくてもいいのにな。

スーパーを出ると、もう日が傾きかけていた。早いもんだと彼は思った。

そういえば、あさってテストじゃないか。何のんびりしてんだ、俺。

足を速める。と、前方に小さな影が見えた。

猫だ。

野良猫だろう。ゴミをあさっている。

「……………」

立ち止まってなんとなく眺めていると、大家さんの言葉を、ふと思ひ出した。

「保健所、か」

でも、別に心配することはないだろう。あいつはこの町にはもういないかもしれないし。

大体今日明日は、お役所は休みじゃないか。
考えてみりゃ、普通、あんなことがあるわけない。

夢だったんじゃないか？
ほっぺをつねってみた。

「……痛い」

赤い首輪。

白猫。

別に、気にするようなことはないんだけど。
真次は歩き出した。

気がつくと、閑散とした通りに来ていた。カレー屋のあるところだ。

目の前には居酒屋。そろそろ営業が始まる時間だ。
彼は裏手に回って、玄関のインターホンを鳴らした。

訊いてみるだけ。

「はい」

出てきたのは中学生くらいの女の子だった。

「どちらさまですか？」

「あ、えーと。その」

とたんになんと言えいいのか分からなくなった。
そりゃあそうだ。猫を訪ねていく奴なんて普通いないし、別にここが話に出てきた居酒屋だという確証も無い。
でも黙ってるのも変だよな。

思い切って聞いてみることにする。恥や体裁は後回しだ。

「あの、この家に、コロネさんっていう猫、飼ってない？」
ああ、なんてこと訊いてるんだろう。普通しないよなあ。こんな質問。

女の子は目を見開いた。

「何で知ってるんですか？」

ビンゴ！だが、しかし……

困った！

「えーと、その」

なんて言えはいんだよ！

口ごもっていると、女の子から話しかけてきた。

「……ひょっとして、猫の声が聞こえるひとなんですか？」

「え？ああ、そう。うん」

なんか変な言い回しだが、気にしないことにする。

「それでさ。コロネさんに会わせてほしいんだ」

現れたのは、のっそりしたでっかい猫だった。

「あんたか」

渋いおじさんみたいに貫禄のある声がした。

「コロネさん？じゃあ、コロネさんもしゃべる猫なのか」

「はあ？知らないで来たのか？……ああ、そうか。ミアの奴だな」

コロネさんはなにか納得した様子で言う。

「あのさ。コロネさん。昨日、ミアに会わなかった？」

「会ったよ」

あっさりと言った。

「やっぱりか」

そうなら、もうあいつは母親のいる町に旅立ったのだろうか。

「……あんたが、ミアの言ってた真次君だね？」

「え、そうです」

なぜか敬語になった。

「ちよいと、話があるんだ」

「ミア？」

白猫の後姿に声がかかった。

夕日に照らされて、白は燈色に染まっていた。

夕日色した猫が振り向く。

「真次。なんで」

「俺も、コロネさんに会ったんだ」

白猫は目を伏せた。

目の前にあるのは、墓標。

ここは、墓地だった。

「あたし達の声ってのはね」

「うん？」

「誰にでも聞こえるものじゃないんだ。どういう理屈かは知らないけど。昔はたくさんいたんだって。そういう人間」

「……………」

「でも、最近になってそういう人がさっぱりいなくなったの」

ミアは墓標に目を向けたまま、言った。

「あたしは、生まれてすぐ捨てられた」

なぜかは分からない。知りたくもない。

真次は先ほどもらった写真を見た。

写っているのは、二十代後半ぐらいの男女と、ぽってりした白と茶の猫。

それと、小さな白い猫。

「あたしを拾ってくれた。あたしが助けてって叫んでた、声を聞いてくれた」

「この人が、ミアの母さんか」

「そう。その母さんが、病気で、なんて。ひどいよ。神様って」

「……………」

「あたし、どうしたらいいの」

「……。コロネさんが言ってたよ。お母さん、最後までミアのこ
と気にかけてた、って」

ミアは真次を振り向いた。真次はお墓に、持ってきた花を手向けた。

墓標に手を合わせて、そっと目を閉じた。

「気にかけてくれてたんだ。せめてお参りぐらいしてあげないと、
親不孝になっちまうぞ」

「……わかってる」

「だったらさ」

真次は目を開けて、ミアをそっと抱き上げた。

「この町に住めばいい。それで、毎週でも毎日でも、気が済むま
で会いに来ればいい」

「真次」

「それに来週から、俺テストなんだぞ。約束したろ」

彼は笑ってみせた。

この目。

母さんと、同じ目をしてる。

「……だったら、今日の晩御飯はサンマね」

「はいよ」

「アイスも」

「どーぞ」

「プリンもね」

「……うう」

墓地を出る直前、ミアは振り向いて花の手向けられた墓標を見た。

「また、来るからね。母さん」

「起きろー！」

鋭い爪が窓ガラス君に食い込んだ。

ものすごく嫌な音がした。

「うぎゃあ！」

「ほら、さっさと起きてよ！遅れるよ」

「むうー。んん？……ぐう」

彼の意識はまだ夢の中みたいだ。

このすさまじい攻撃にすら、真次は適応し始めていた。

ミアは爪を再度、振り上げた。なんだか楽しそうに。

「起きろっての！」

叫んだ白猫の首で、小さな鈴がしゃらんと鳴った。

友達の証だ。

飼い主とかペットとか、そういうのじゃなくて。

横にいて、支えあったり出来る、友達の証。

)
F
I
N
)

11（後書き）

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます！設定や描写、背景などに大量の問題を抱えつつも何とか完結させることが出来ました。

ご意見ご感想等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922a/>

白の友達

2010年11月25日02時32分発行